

---

# 電脳コイル いつか花のよう

此花耀文

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

電腦コイル いつか花のように

### 【Zコード】

Z33571

### 【作者名】

此花耀文

### 【あらすじ】

アニメ「電腦コイル」最終話本編直後の物語。ヤサコにいざなわれ、この世界に戻ってきたイサコ。退院し大黒を離れるまでの短い時間、彼女が見た夢とは…

## 1・タベ

小此木優子。

その名前を思い出すたび、甘やかな懇いと刺すような痛みが同時に私の心によみがえる。

彼女と最後に会ったのはもう半年も前のことだ。それとも、まだ半年しかたつてないと言つたほうがいいのだろうか。彼女と同じ道を探したあの頃の出来事は、私の心の中心に余りにも高く聳えていて、そこからどれだけ離れたのか、まだうまくつかむことができない。

けれども、これから新しい道を歩む」と、度し難いその記憶も少しずつその大きさを失つていき、いつしか片手で扱える懐かしい思い出となつて、心の引き出しに収められるのだろう。引き出しには「大切な記憶」というラベルが貼られるけれど、その中身は砂時計の砂のように少しずつ毀たれ、いつしか淡い郷愁の光の中に沈んでいくかもしない。

でも、彼女のことは決して忘れない。

彼女が私を導いてくれたあの日、厚い壁で何重にも取り巻かれ、永遠の孤立を成したかに見えた私の世界は、晴れた空にとける雲のようにあつたりと光の中に消えていった。どうしようもなく甘くて懐かしい、だけれどどうしようもなく孤独なその場所から私を救い出してくれたのは、おとなしく目立たない性格の、おおよそヒーローとはかけ離れた子だった。

それは私にとって意外なことだった。私は彼女みたいな子は好き

じやなかつたからだ。以前の学校にも、「子供らしい優しさ」を気取つて近づいて来ながら、その裏には変に世間ずれした打算とおびえが見え隠れする、いつも誰かの影に身を置いている臆病な子たちはいくらでもいた。そんな子たちの見せる卑屈な視線や、現状にしがみつく怯懦が気に入らなくて、私はことさらにきつく当たつて払いのけてきた。けれどどうしてだろう、大概の子は私がそつやつて露骨な嫌悪を示すと逃げ出したり、陰湿な嫌がらせをする側に回つたりしたのに、彼女は逆に近づいてきた。やがて、彼女の言葉は私の心を震わせることになり、堅牢な壁の向こうから注ぎ込まれた痛いくらいに眩しい光の力で、私はこの場所に帰つてくることができた。

一体彼女の中のどこにそんな強さが潜んでいたんだろ？。私もいつかそんな力を持つことができるだろ？。私はその強さに憧れる。

もしかすると、と私は考える。私はあの時もう一度この世に生み出されたのかかもしれない。私が目を開けた時彼女が見てくれた微笑みは、生まれたばかりの子供に対する祝福と激励だったに違いない。だから私は、初めて光に満ちた世界に受け入れられた胎児が不安と希望をもつてするやり方で、不器用に彼女を抱きしめ、慈しんだ。その時私はやつと理解することができた。私の世界は閉じてしまつたんじやない、まだ始まつてさえいなかつたんだ。

だからこそ、なのだろうか、その日、彼女やみんなが出て行つたあの病室はがらんとしてしまつて、立ち上がる取掛かりさえないような気がした。今まで私が、これが世界だと信じこんでいたものは全て崩れ去つてしまつて、知つていることなんて何一つないみたいだ。でも、それは決して怖いとか不安だとか言うわけではなく、むしろ暖かな心地よさだった。なんだかふわふわして、頼りないよう、それでいて安心したような夢見心地の中、私は歩く方法すら忘れてしまつたかもしれないくらいに無垢だった。無心に見つめ続

けていた天井は次第に輪郭を失つて、のびやかな未来そのものみたいな優しい白となつて私を包んでいった。

ふと声が聞こえた。

誰かが私を呼んでいた。その声は、白が織りなす世界の、あえかな、更紗が風に寄せられてできたような翳りから聞こえてきた。低く呴くようなその声が何を言つているのかはよく聞き取れない。少しでもよく聞こえるように耳を傾けていると、いつの間にか目の前の白がスクリーンになつて、少し険のある目をした少女の姿を映し始めた。

少女は何かを目指して白い世界を風のように進んでいく。その姿は見ていて小気味よい。だが何故だらう、少女が通り抜けたあとはそれまでの清浄を失つて灰色に濁り始める。見ているうちにその濁りは増殖し、前を進んでいく少女に追いすがつしていく。少女はそれに気がつかない、あるいは気がつかないふりをしている。危ない、このままじゃ捕まる。私は思わず目を伏せた。

「天沢さん」声が近くで囁いて、私は一気に現実へかえつた。うとうとしてしまったようだ。

少し心配そうな顔をした彼女の顔がそこにあつた。

「小此木……まだ帰つてなかつたのか」

「天沢さんのかわいい寝顔が見たくてね」

しばらく前までの私なら確実に無視していた。その時もそうしようと思った。いくら恩人だつてなれなれしがだ。

でもできなかつた。気がついた時には私の顔は真つ赤だつたからだ。

「くくっ、天沢さん真つ赤」

言われなくてもわかつてゐる。

「……」

「あつごめんなさい」

所在なさに不貞寝を決め込むと、彼女はあわてて謝る。じゅじゅる表情の変わる子だ。にくまれ口の一 つも言ひてやるひつと起きあがつたら、涙がひとしづく頬を伝つた。

「天沢さん……」

「小此木。さつさと言えなかつたことを言ひておく。私を迎えてくれてありがとう」

一言ずつゆづくつと、朗読するよひませつきりと発音した。よかつた、最後までうまく言えた。

「……うん」

彼女ははにかむように微笑んで頷いた。その笑顔があんまり暖かくて、もう一筋の跡がつきそうになつたから、私は少し慌てて話題を変えた。

「それで、何しに来たんだ？」

「別に用つてわけでもないの。帰りがけに様子を見ていこうと思つて。眠つてるようだつたからそのまま帰るひつと思つたんだけど、ごめんなさい、ちょっとうなされてるみたいに見えて声をかけちゃつた」

「うなされてた……私がか」言つてから我ながらその間抜けさに呆れた。私以外誰がいるんだ。

「あなた以外誰がいるのよ」

こいつ、人の失言には的確に突つ込んでくる。初めて知つた彼女の意外な一面。これは私だけが知つている彼女の姿だろうか。それとも、知らないのは私だけで、彼女の友達はそんなこととっくにわかっているのだろうか。

「実はちょっと妙な夢を見てたんだ。うなされてるよう見えたの

か

「うん、少しだけ苦しそうな顔をして、つぶやいてた」

「なんて」

「『『めんなさい』』」

私が「『めんなさい』」って……謝つてたのか？ 誰に？ なんで？

そもそも今の話と私が見ていた夢とは全然一致しない。

「どういふことだ？」思わず聞いてしまう。

「私に言われてもわからないけど」

わからないと言つた割に、彼女は何か少し言いよどんで視線をそらした。この目。この目を私は以前にも見たことがある。そうだ、転校してすぐのころだったか、下駄箱のところで「友達になろう」と手を握られた時だ。

それを思い出したのと同時に、私はその時自分が彼女に何を言ったか思い出した。その瞬間、周りの風景は全く変わってないのに、舞台が暗転するみたいに病室が丸ごと沈み込んだような気がした。そうしたら彼女のほうを見られなくなつた。なんであんなことを言つたんだろう。言つことができたんだろう。

「天沢さん、どうしたの？ 具合が悪くなつたなら、先生呼ぼうか」私ははつきり責ざめていた。ナースコールに手を伸ばしかける彼女をとどめる。

「いいんだ。大丈夫」

そして勇気をもつて彼女を見上げようとした。

「悪いけど、今日はもう帰つてくれないか」

違つ。こんなことは言おうとしていない。焦る心とはまるで別の生き物みたいに、私の体は彼女の真逆を向いてベッドにもぐりこんだ。「ごめんなさい、疲れてるのに話しこんじやつて」

「いや、いいんだ」

「それじゃ、またお見舞いに来るね」

「うん」

私の体はまだ動かない。彼女は帰つてしまつ。

「……天沢さん」

彼女が近づいてくる気配があつた。肩に手が置かれた瞬間、私は滑稽なほどに動搖して、びくつと体を震わせてしまった。なんでそんなことができるんだ。私はあなたにひどいことをしたのに。

「さつき天沢さんが見てた夢、きっととても大切なことだと思つ。

言わなくてもいいから、忘れないで考えてみて「

混乱する思考の中で彼女の言葉は意味をなさず、響きの編隊飛行になつて私の頭の中を飛び回る。何とか「うん」とだけ答えた。もういい、離して。離してくれないと私の心は膨れ上がる罪悪感で破裂しそうだ。

気が付くと病室にはもう誰もいなかつた。うす闇が、端のほうから少しずつ室内を満たしていく。そのぼんやりした灰色が他の色すべてを覆い尽くしたころ、私はやっと起き上がることができた。

「小此木は私を助けてくれた。私は他人を受け入れる強さを手に入れたんだ」

言葉に出して言つてみた。でも、その声は細く、小さく、部屋を支配する灰色に吸い込まれていった。

## 2・夜

小此木。小此木。小此木。繰り返し呼べば呼ぶほど、言葉は磨滅して空疎な音の連なりに還つていく。だがその残滓は消えることなく、しぶとくまとわりついた意味のかけらが熱を持つて病室に溜まつて、やがて私の息を喘がせる。

夜になつて私は高熱を出していた。先生は多分イマーノの副作用によるものだろうと言つていたけど、「原因不明」を言い繕つてはに過ぎないだろう。原因は私にはよくわかっている。これは彼女に対する甘えなんだ。彼女に会いたい。

それで、どこか心の奥から意識の幽かな道を通つてやつてきた誰かの声が、低く問う。会つてどうするの。無視して「ごめん辛く当たつて」とめん本当のことを言わなくて「ごめんこれからはずつと側にいたいんだだから優しくして私に微笑んで私だけを見て私を助けて守つて、つて地面に頭をこすりつけて頼むの？

本当のことを言つと、そうしてしまいたい気持ちはある。私には誇れるものなんか何もない。これから一人で生きていく自信もない。だから、彼女の優しさのにじ毛に包まれていつまでも自分の流す涙のしずくを数えていたい。

でも、それじゃ駄目なんだ。それじゃ、アツチにいた時と変わらない。私がそんなことを言つたら、彼女は今度こそ私を見捨てるだろう。自分の足で立たなくちゃ。こんな甘えは捨てられる。だから私は立ち上がることができる。

自分一人で立てる証明したくて、私は無理に起き上がった。窓まで歩こうとするといつと、情けないことによつぱり足取りが現実感を失つてふらふらする。それでも何とか数歩を進んで窓にたどり着き、ガラスをいっぱいに押しあけて体の隅まで伝わるように息を吸つた。

変に熱を帯びた私の中を夜風が心地よく渡つて、心と体をさましてくれる。

胸のあたりに鈍い痛みがあつた。こつちは本当にイマーノの後遺症だろう。全然構わない、といつよりかえつてありがたい、こんな痛みに耐えることですむのなら。むしろ痛みを失うのを恐れるかのように、わざとベッドに戻らず窓辺に立ち続ける。が、それがいけなかつたのだろうか、息が詰まるような感覚に悪い予感が込み上げた瞬間、これまでにない激痛が突然私を襲つた。身体感覚と意識のすべてが痛みに凝集され、私はなす術もなくその場に倒れこんだ。胸が押しつぶされるようで呼吸ができない。メガネはもちろん掛けていない。医療用のバイザーもさつき暑苦しくて外してしまい、ベッドの上だ。どうにかしてベッドまでたどり着いて、バイザーかナースコールで人を呼ばないと。

ベッドまではほんの2メートル足らずだ。そこまで這つて行って、上体を起こせばいい。ただそれだけのことだ。それだけのことが、今の私には限りなく不可能に近い苦役に思われた。でも、やらなくちゃ。体を動かそうとすると、胸のあたりから手足の先まで体を貫く光のように痛みが走り、思わず身を縮こめた。やはり暗号の使い過ぎが原因だろうか。特に小此木の家で見つけたメタタグは負担が大きかつた。小此木は慣れもしないでよくあんなの使えたな。まずい、もうどうしようもなく痛い……

プロメテウス。唐突に頭に言葉が浮かぶ。神から火を盗み人に伝えたプロメテウスは、その罰として永遠の苦痛を与えられる。永遠の苦痛、苦しむためだけに生きる者。初めてその話を聞いた日は、そんなものがあり得ると考えるだけで、恐ろしさと絶望に夜中まで眠れなかつた。それから、プロメテウスの名前は私にとって一種の呪文になつた。恐怖や苦痛、絶望や不安に耐えがたさを感じた時、心の中でプロメテウスの劫罰を思つことで、自分の苦しみを忘れることができた。

プロメテウス。プロメテウス。繰り返し囁えて痛みから気をそらしながら、どうにかベッドの足まで這い進む。ここから上半身を起こして腕を上げればいい。まずは普通に両腕をついて体を起こそうとした。途端に、心臓を直接掴まるような衝撃が走って、私はその場に崩折れた。身をよじって呼吸を抑え、じつと痛みをやりすごす。今のやり方はだめだ、心臓に負荷がかかりすぎる。しばらく我慢して、ようやく手足を動かせるようになったところで、今度はベッドの脚に腕をからませて上体を起こそうとした。しかし、力を入れようとするどどうしても腕が滑り落ちて起き上がることができない。私の両手は何度もむなしく宙をかいだ。

言つことを聞かない身体と格闘しながら、私はだんだん悲しくなってくる。どうして私だけがこんなに暗い、誰もいないところで結果も見えない戦いを続けなければいけないんだ。お兄ちゃんの時だつてそうだ。私がお兄ちゃんのためにどれだけ身を削つて力をつくしたか。そんな私の行いに、現実は何をもつて答えたか。

どうしても生きることができるないならどうすればいい? 何回目かの試みが徒労に終わつた時、私は絶望したというより不貞腐れたような気持ちになつて床に転がつた。生きたくたつて生きられない子だつている、どうしても「みんなと一緒に」には進めない子だつている、そんな子たちをまとめて横並びにして、生きることは良いこと、だから皆で生きなさいって言つたつて、そんなの傲慢だ。生きられないなら生きない自由だつてある。あなたの痛みと私の痛みは違う、私の痛みは私にしかわからない、そうだろ、答えてよ、もういいくて言つてよ、ヤサコ!

「私にはあなたを苦しめる権利はないわ。でも、これだけは覚えていて。私はこれから流れていく時をイサコと進みたい」  
私にはその時、闇の中に差し伸べられた手がくつきりと見えた。だからそれをつかみ取ろうと手を伸ばした。

気がつくと私はベッドの上で上半身を起こし、開かれた窓の外を見つめていた。窓からは何もなかつたかのように夜の穏やかさをたえた風が吹き込み、わずかに残つた私の熱を散らしていく。あの手は夢だったのだろうか。それとも今の出来事全てが？でも、夢か幻覚かそれとも奇蹟か、そんなことはどうでもよかつた。

忘れていた。何より大切なのは、私はもう一人ぼっちじゃないってことだ。

「わかった、一緒に行こう」私は、生きていくことを決めた。

### 3・昼夜がり

次の日、私の熱はすっかり下がっていた。精密検査の結果にも特に異常が見つからなかつた私は健康体と診断され（昨夜も結局人を呼ばなかつたのだ）、近く退院できることになつた。

診察の後、おばさんにお兄ちゃんの人形を繕つてもらつた。

入院する前まで、私はこの人とうまくいっていなかつた。自分の価値観でしかものを判断しようとせず、従わない者の言い分を認めず、「子供だ」と決めつける。何よりも自分が安心したくて、まつとうだと信じたものに相手を引きずつていこうとしているんだと思つていた。だから、口先でよくしたいなんて言われても、そこには親切の仮面をかぶつた否定や抑え付けが垣間見えて、私はますます頑なになつた。

でも、今になつてみれば、おばさんはおばさんなりに私のことを思つていてくれていたことがわかる。おばさんは心を開かない私を見捨てなかつた。他者を否定しようとしていたのは私だ。

午後の落ち着いた光の中で針と糸を使うおばさんの姿には、たつた今行つていい仕事への自信と肯定が、大げさに言えばこれまで人間が連錠と培つてきた生活の安定感に裏打ちされてあつた。その力強さに触れるど、ついこの間までの、普通の女の子であることに逆らつていた私が少し恥ずかしくなつた。

「幸子さん、退院されたそうよ」無駄のない手の動きに見とれていた私に、唐突におばさんが言つた。「これであなたも金沢に戻れるわね」

その知らせ自体はある程度予期していたことだから驚きはなかつたが、この場でそれを教えられたことは、私に決意を強いた。金沢に戻る前におばさんと過ごす機会はもう限られる。できるうちに、お

ばさんに伝えなくてはならない。

「おばさん、あの」

「何ですか」

「今まで、『めんなさい。…あと、ありがとう』我ながらつたない言葉だ。だが他の文句は思いつかなかつたし、それにこれ以外の何を言つても上辺だけの美言になりそうな気がした。

「今になつてそんな言葉が聞けるなんてね」返ってきたのは、取りようによつては辛辣な答えだ。少しこわかつたけど、下に向いていた視線をおばさんのほうに向けた。その途端、裁縫の手を止めてまつすぐにこちらを見つめているおばさんの姿が目に入つて、私はすぐまたうつむいてしまつた。

数秒間、氣まずい沈黙が下りた後、おばさんが何か言おつと息を吸い込むのがわかつた。

言わせてはならない。その言葉が肯定であれ否定であれ、私が投げておばさんが返したボールを、おばさんに拾わせるのはルール違反だ。取り決めを守つて他人と言葉をつなぐ。多分私はここから始めて、自己と他者との道の作り方を学び直していかなければならぬいんだ。

「あ、あの」とにかく口に出した。が、頼りない声だ。その上、言うべきことは全く決まっていなかつた。

「何かしら」

「あの……」声のトーンが明らかに落ちてゐる。見つからない。焦れば焦るほど、私の気持ちにはもやがかかつて、心から遠のいていく。その代わり目の前の前のおばさんの存在ばかりがどんどん大きくなり、か細い私の声などおばさんに届く前に霧消してしまつのではないかという不安が、泥のようにまとわりつく。

だめかな。次々と湧き出るおそれと諦念の淀みに沈みかけたその時に、ほんの短く、声が聞こえた。

「あなたの名はイサウ」

思わず辺りを見回したが、おばさん以外の誰もいるわけがない。

けれど、その言葉は不思議な淨らかさで私にとりついた濁りを払ってくれた。心に言葉が戻ってくる。

私はまっすぐおばさんを見つめて、話し始める。

「私はこれまでおばさんに迷惑ばかりかけてきた。

今はなくなってしまったけど、私には大切な目的があった。私は、一人でそれをやり遂げる、誰の力も借りないって思つてて、それで自分勝手に行動してきた。でも本当は全然一人じゃなくて、結局おじさんとおばさんが私の面倒を見てくれていたんだつてことに気付かなかつた。

今度のことも、私が相談もなく行動してこんなことになつてしまつて、それでもおじさんもおばさんも私を責めたりしないで、世話をしてくれてる。

やつとそれがわかつたの。だから今までのことを謝りたくて、それとお礼も言いたかった「決して流暢ではなかつたが、確かな口調だつた。

「あなた、この何日かで少し大きくなつたわね」

私をじつと見つめてから答えたおばさんの目は、ゆるやかに微笑んでいるようにも見えた。

「(こ)の間までのあなたは私から見たらまだほんの小さな女の子だった。それなのに年上ぶつて行動するあなたに、私もちょっと反感をもつてたのね。だから、ことさらあなたを子供扱いしてしまったのかもしれない。私のほうこそ悪かったわ。：金沢に戻つたら私たちのことなんてすぐに忘れてしまうかも知れないけれど、年賀状くらいは書いて頂戴ね」

「はい」私はおばさんにためらいのない笑顔を向けた。

「あなた、そんなふうに笑うことができたのね」おばさんはやや呆れたように言つてから、少しづつ嬉しそうな顔になつた。

一人になつてから、少し音楽を聴いた。ツェムリンスキーの「人魚姫」。有名な童話に題を取った作品だ。

入院中退屈しないようにと、おじさんが私の部屋にあつた音楽ファイルを持ってきてくれたのだ。と言つても私は最近まで音楽を聞くことなんてほとんどなく、開けてみると、そのファイルは元々私の実家にあつた、母さんのものだつた。多分クラシックの、名前もよく知らない作曲家が並んでるので、とりあえずタイトルで選んでみたのだが、冒頭の重い弦の響き、それにたゆたうように寄り添う管の音色を聴いた瞬間、幼い口が再現した。

「人間の王子様に恋をした人魚姫は、魔法使いに頼んで人間になりました」

私を膝に抱いて音楽を聴きながら、母さんが筋を教えてくれたその言葉が、ぽつかりと記憶を抜け出て、泡のように浮かび上がつた。冷たい風の吹く冬の夜の、でもそこだけは別世界のようになごやかなオレンジの明かりが点つた部屋だつた。

「ですがそれと引き換えに人魚姫は声を失つていきました。言葉を持たない人魚姫の心は王子様に届かなかつたのです」

穏やかに響く言葉の中に、何故か遠い寂しさと頑なな孤独を感じた私は、母さんがそのままどこかに行つてしまふのではないかと不安になつて、前に回された腕に力いっぱいしがみついていた。

「王子様は他のお姫様に恋をしました。人魚姫は海に身を投げ、泡となりました」

ヴァイオリンが奏でる人魚姫は最後まで可憐で一途に恋を見つめ、

破れて消えていく。悲劇的な幕切れに私はべそをかきそうになつたが、音楽はなおしばらく続いた。楽曲は、人魚姫を慈しむように、始めは優しく、次第に力強く、これまでのモチーフをなぞり、滅びゆくものを見守る慈愛で幕を閉じた。

「泡に身を変えた人魚姫は海を越えてどこまでも高く、昇つていきました」

私以外の誰かに語りかけるような口調にいぶかしさを感じ、見上げた母さんの顔は、それまでと同じように優しく微笑んでいた。しかし、その瞳はまるで虚空を見つめるように、ここではないどこかに向かつて見開かれていた。

あの母さんの目を見た刹那、私は悟ったのだ。母の心と私の心は違つのだと。人の心は目の眩む深淵で隔てられているのだと。

それ以来ずっと、私は、人と人との繋ぐ道を探し続けてきた。そして、血のにじむ辛苦の末、私がやつと見つけたと思った道は、しかし間違っていた。それは、私自身の心に戻る出口のない道だった。

けれども、私には迎えに来てくれた人がいた。私は、他の誰でもない私に向けられたその眼差しを思い出す。だから私はこれからも生きていける。

ふと、思った。母さんは、これから生きていけるのだろうか。母さんを助けられる人はいるのだろうか。  
ぎくりとした。

あの時の母さんの目は、きっと父さんに向けられていたのだろう。でもそこに見える道は、かつての私と同じ、己に戻る道だ。  
父さんに加えてお兄ちゃんまでを失った後、そんな母さんに手を

差し伸べられたのは、もしかすると私しかいなかつたんじやないだろうか。それなのに私は、お兄ちゃんのことばかり考えて、少しも母さんのことなんて顧みなかつた。己が救われたい一心で、自身が他人の支えになるなんて思つてもみなかつた。なんて傲慢で幼い子供。

母さんの事情が許すなら、退院した足でそのまま金沢へ戻ろう。そう思つた。できるだけ早く、この気持ちがしぶんでもう前に母さんに会いたい。

それなら、大黒小にはもう戻らないのか。私の心はまたたじろいだが、しばらく迷つた末、「戻らない」と決めた。

多分、今の自分は他人との距離の取り方が分からなくなつてしまつてゐるはずだ。さつきおばさんとしたみたいに、少しずつやり直していくかなくてはいけない。でも、いきなりあそこに戻つて、これまでのいきさつを知つてゐる人間と一緒にいることに、私は耐えられないかもしぬなかつた。今、私の心は長年まどつていた堅い殻をなくして震えている。最後に学校に行つた日のような嫌がらせに会つたら、非力な心はぐすぐずに崩れてしまふか、前よりも強固で狭い殻の中に閉じこもつてしまふかもしぬれない。

その時は彼女が助けてくれる、そんな甘い期待もあつたが、だからこそそうしてはいけない、と思い直した。おそらく彼女は私を助けてくれる、でもそうしたら私は、これまでお兄ちゃんにしてきたみたいに、今度は彼女に頼り切りになつてしまいそつだつた。多分それは、私だけじゃなく彼女にも悪い結果をもたらすだらう。

でも、それなら彼女と会える機会ももう多くはないはずだ。彼女の姿が心をよぎり、私は胸を詰ませた。少しだけ遠慮がちに肩をすくめた彼女の佇まい、心地よい熱のかよつた彼女の手、柔らかく

て良い香りのした彼女の髪、そして全てを赦してくれる暖かさをもつた彼女の微笑み、会って全てをしっかりと私の心に留めておきたい。

今日も彼女は見舞いに来るだろう。それは私にとってこの上なく大切な機会になる、そう考えた時、昨日見た夢のことを思い出した。あの夢の意味は今なら簡単にわかる。というよりは、昨日彼女に背を向けた時からわかつていて、気付かないふりをしていた。

あの声も、濁りも、私の罪を悔やむ思いだ。私は、これまでの行動によって、自分に親しく接しようとする周りの人間を傷付けてきた。それは償われなくてはならない。そうしないと、私は後悔という名の妄執に光を奪われ、再び道を見失っていくだろう。だから、今度こそ彼女に謝らなければならぬ。

私は急いで自分の少ない語彙の中から言葉をあさり始めた。

#### 4・再び、タベ

私は大人びた子と思われることが多いようだが、小学生らしく漫画だって読む。以前いた学校の図書室にあった漫画に、「こんなシーン」があった。

ある医者が、ある女性の手術をする。女性は医者に恋をしている。しかし、病は、女であることをやめなければ直すことができない。手術前、恋の終局に悲嘆する女性に、医者は語りかける。

「今この瞬間は永遠だ」と。

最初に読んだ時は意味がよくわからなかつた。時間が過ぎゆくことは止められないのだから、「永遠の瞬間」なんて言い逃れか幻想だと思って、それでその漫画のことは忘れていた。

夕方になつて、小此木が来た。

「ここにちは」

「ああ」私の態度はかなりつっけんどんだっただろう。なぜそうなつてしまつたかといふと、要するに、私は困り果てていたのだ。

「小此木に謝らなければならないこと」について考え始めた私は、それが小此木とのほぼ全てのやり取りにおいてあてはまるこつを発見した。さすがにちょっと愕然となつた。一体小此木に何と言えばいいのか。

もういつそのこと「これまでのこと、みんなごめん」と泣き崩れて彼女の足元にすがりつく。そうしたら、小此木は私にビンタをくれて、「甘えちゃだめ、未来はこれからよー」と、えらく前向きだけど、よく考えるとえらく当たり前の台詞を言うのだ。私は悔い改め、二人は目に星をいっぱいためて夕日に向かつて走り出す。

うふふあははと意味のない笑いを洩らしながら走り続ける甘美な妄想に浸ついたら、時間は瞬く間に過ぎてしまった。

だから小此木がやつてきた時、何一つ決まっていなかつた。

「あら、今日も」機嫌斜め

「…いや、そうじやない」

「そうね、それがあなたの自然体かも」

「したくてしてるわけじやない」

「わかつてゐる。あなたは本当は優しい子だもの」私の心の深いところをえぐる言葉。

「なんで」

「え」

「なんでお前は私の言つてほしいことがわかるんだ」

「そんなの、顔を見ればわかるわ」

「私の顔はそんなにもの欲しげか」傾いた会話のバランスを、皮肉でなんとか戻そうとする。

「天沢さんつて実はけつこうわかりやすい子だよ」だが、ずばりと返されてしまふ。でも嬉しい。今まで私のことをそんな風に言つてくれる子はいなかつたから。

よかつた。何の脈絡もなしにそんな言葉が頭に浮かんだ。考えてみると、今の状況をこんなにうまく言い表している言葉もない。だつて私は今すぐ平凡なやりとりに安らいで、満ち足りた思いになつてゐる。まさに、よかつた、以外の何でもない。

いつの間にか微笑んでいる私を、小此木が微笑みながら見つめているのに気がついて、につこり微笑み返した、その瞬間に我に返つて、私は昨日同様真っ赤になつて顔をそむけた。

「あれー、今のスマイルよかつたのに」あ、よかつたつて言つた。じんわりと心がぬくもる。

「からかうな」無論言葉には出さない。

「からかつてなんかないよ。天沢さん、学校でもその笑顔だつたらもっとクラスの人気が出るよ」

学校と聞いて引越しのことを思い出し、それが表情に出かかる。気

取られないように急いで話を継いだ。

「つまり今は人気なしということか」

小此木の顔がさつと曇るのを見てから、ようやく自分の失敗に気がついた。実際、人気がないどころか嫌われ者だ。多分入院についても、口さがないうわさが飛び交っているのだろう。

不穏な思いが空氣を淀ませて、なんとなく一人とも黙りこんでしまった。私はどうにかして小此木に謝らなくちゃいけないと焦ったが、なんて切り出せばいいのかわからないし、それ以前に何を言うのかすら決まっていない。小此木は小此木でどうやら言いたいことがあるみたいなのだが、なぜか喋らない。そうやって30分近くも過ごしたんだから呆れる。

「…あのね、天沢さん」会話の口火を切ったのはやはり小此木だった。私には勇気が足りない。

「私、友達を一人失くしちゃったみたい」

「え…」予想外の話に、私は言葉を接げなかつた。

「私ね、前の学校で友達だつた子をいじめてたの。それなのに、自分では相手が私をいじめているなんて思いこんで、罪の意識から逃げてた。そりや嫌われるわよね」

「小此木が…いじめを」

「天沢さん、前に当てる見せたじゃない」

「あ、あの時はすまなかつた」

「いいのよ、本当のことなんだから」

そして、彼女は急に穴があいたように表情をなくして続けた。

「天沢さん、私は本当は優しい子じやないよ」

ふと漏らしたようでいて、決然としたものを感じさせる口調だつた。

「いや、お前は優しい。私を助けてくれたじやないか」その言葉に強い恐れを感じ、私は即答で否定した。

「きっとあなたの気を引きたくてやつたんだよ。自分のためだよ」

「自分のためならあんな、命がけで私を守つたりしないだろ?」「別に命がけじゃないよ」

さも大したことではないように、彼女は言った。しかし私にとっては衝撃だった。彼女が私の大切にしている思いを壊そうとしているのかと疑つた。何か言い返したかつたが、彼女の考えがつかめなくて、私は不安の中に沈黙せざるを得なかつた。

「天沢さんさ、さつきあの時のこと謝つたけど、なんで?」少しの間をおいて、彼女は突然話題を変えた。

「それは、小此木の気持ちを考えないで、傷つけたからあの時の小此木の顔。一度と彼女のあんな顔は見たくない。でも、そんな顔をさせてしまつたのは他ならぬ私自身なんだと思つと、私の絶望は深まる。

「でも天沢さんの言つたことは正しかつた」

「正しければ人を傷つけてもいいわけじゃない

「傷つけ合わなければわからないことだつてある!」

彼女は急に強く言い切つた。私は驚いて彼女を見上げた。こんな口調で話す小此木を見たのは初めてだ。私はよほど情けない顔になつていたのだろう、彼女は表情をゆるめ、少し笑みを浮かべてみせた。

「天沢さん、なんで私がこんな話をしてゐるのかわかる?」

「いや、わからない」正直に答えた。

「それはね、天沢さんに私を知つてほしいから

「お前を?」

「うん。天沢さんの言つとおり、私には優しいところもあるかもしない。でもね、それはさつき言つたみたいな私のずるいところや、嫌なところと結びついてもいるんだよ。私は天沢さんには嘘をついたり自分をよく見せかけたりしないつて決めた。だから、嫌な自分も全部見せるの。私の醜いところ、汚いところも知つたうえで、天沢さん、あなたが赦すなら、私はあなたに受け入れてほしい」

その時の私の気持ちを説明するのは難しい。抑えつけてきた感情のよどみがにわかにかき回されたように、泣きたいくらいの嬉しさや、強い憧れ、少々の寂しさ、親密感や孤独感が次々と湧き上がり、では消えていく。

彼女と過ごした日々が脳裏を駆け巡り、その時々の感情までもが鮮やかに再生され、私は想い出に翻弄された。

「「めんね、急にこんなこと言つちやつて」

記憶の奔流から我に返り、田を上げると、思いのほか近くに小此木の顔が見えた。

「私を受け入れるかどうか、別に今決めなくていい」「咳くようこそ」と、そう言って、彼女は窓の外を見つめた。

「私はこれまで他人を傷つけないようこそ、自分も傷つかないようこそ生きてきた。臆病だったの。それでも楽しいこともうれしいこともあつたから、構わないと思ってた。でもね、そうしていては永遠に取り逃してしまふものもあるって、天沢さん、教えてくれたのはあなたよ。だから、天沢さんにこそ伝えたかったの」「

「私にだって弱いところやだめなところがある。お前の気持ちを正面から受け止められないかもしれない。それがわかつて言つてるんだな」不思議なことに、思考よりも先に言葉が発せられた。

小此木は黙つてうなずいた。私は少し声を落として続けた。

「それに、お前の告白が私を傷つけるかもしれないということも」

彼女は下を向けていた目を上げた。強い視線が私を捉える。

「あなたはその痛みを越えてきた。だからあなたがそれに怯えるとは思わない」

輝かしいばかりの言葉。それは、無意識に小此木に甘え、自分に都合のいい言葉ばかりを引き出すとしていた私から、陰を取り払つた。

「そう、だったな」私は、痛みを引くを受ける決心をしたんだ。忘れてはならない。そして。

「私からも言わなくちゃいけないことがある」彼女の視線に負けないように見返す。

「これまで小此木に辛く当つたり、突き放すようなことをしたり、身勝手にふるまつて本当にすまなかつた。私も小此木と同じ、いや、もつとたちが悪かつたんだ。だつて私は自分が傷つきたくないだけ、そればかり考えて生きてきたんだから。小此木、私を赦してくれるか」

小此木は微笑んだ。

これまでにも何度か感じていたことだが、小此木の虹彩は美しい日本人としては少し薄めのやわらかな茶色をしたそれは、もしかするところでは、彼女の内面と外界の繋がりを遮蔽する、薄いけれど強靭な膜として働いてきたかも知れない。

しかし、今私の目の前にある小此木の瞳は、私と彼女の隔たりではなかつた。決して均質に澄んでいるわけではない、濁りや陰りもある。しかし、いや、だからこそ、それは決意の光に彩られ輝く心そのものようで、私はその纖細な鮮やかさに息をのんだ。もっと見つめていたいと思つたから、腕を伸ばしてその美しさが壊れてしまわないようにゆっくりと包み、引き寄せた。

「イサコ」小此木が囁いた。「私たち、これから別の道に向かつても、一緒に進もうって決めたのを忘れちゃだめだよ」小さくて安らかな声。でも、その声は優しさだけじゃなく、悲しみ、苦しさ、絶望を知り、それを乗り越えられるだけの力強さを秘めている。

「もちろん忘れるわけがない、ヤサコ」心と体に伝わつてくる暖かさを記憶に強く刻みながら私は答える。

「そうだ、約束しよう。私たち、いつか花のように笑つてみせるつて。その時、必ずお互いのことを思い出すつて」

「うん、誓つよ。それが、私たちがともに進んだ証拠

それが今までのところ彼女と会った最後だ。この後すぐ私は退院し、金沢へ戻った。

結局転校のことは小此木にもはつきりと伝えることはなかつた。大黒小の皆は、私が何も言わずにいなくなつてしまつたと思つてゐるだろう。でも、なんだかそれも私らしくて悪くない。橋本フミエや黒客の連中に一言の詫びもしなかつたのは今でも少し心残りだが、あいつらにはHキサイティングな日常を提供してあげたんだから、それでおあいこだらうと思つたりもする。

最後に、大事なこと。「永遠の瞬間」はあつた。傷ついた時、迷つた時、私はそこに戻つてくる。そして、胸の奥に刻んだ誓いを確かめて、もう一度歩きだす。

やうやつて、時は流れしていく。約束を乗せて。

#### 4・再び、タベ（後書き）

本稿にて完結となります。  
拙作をじご覧戴き、ありがとうございました。

次は、金沢で母と暮らすイサコの生活について書いたかと思します。  
本作では外的な事件が全くなかったので、そういうしたものも含めつ  
つ。

引き続きお付き合ひ戴ければ、作者として望外の幸福です。まじで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3357i/>

---

電脳コイル いつか花のように

2010年10月8日15時26分発行